

## 旅行文化の新たな局面

著者	佐瀬（菊池） 優子
雑誌名	日文研叢書
巻	43
ページ	395-400
発行年	2009-03-19
シリーズ	共同研究報告書 No. 89
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005182">http://doi.org/10.15055/00005182</a>

## 旅行文化の新たな局面

はじめに

本稿は、「旅」や「移動と交通の文化形成力」について、筆者がこれまでに日常的な観察と経験に基づいて考察してきたことから、二〇〇五年三月に行われた国際研究集会「旅と日本『発見』」の研究報告や講演から示唆を得てまとめたものである。

### 一、物語としての「旅」

旅行という文化が日本の大衆に広く浸透して久しい。ここ数十年で様々な趣向を凝らしたパッケージツアーが増え、海外への個人旅行などもしやすくなった。最近では、個人旅行のスタイルも非

佐瀬（菊池）優子

常に多様化し、さらには「見どころを見てまわる」という従来の旅行の基本スタイルから脱却して「暮らすように滞在する」ことを志向する人も増えてきた。その一方で、旅行の記録や報告の仕方にも変化がみられる。例えば、十年前までは、あちこちの名所で撮ってきた記念写真を家族や友人に披露するという報告の仕方が一般的であったように思うが、最近では、非常に多くの人が、自身の旅行を手軽に画像入りの旅行記にまとめあげ、インターネット上で不特定多数の人に向けて発信したりしている。

このような流れの中で筆者は、旅行文化はいま新たな局面を迎えようとしている、と感じている。それは、旅行の「旅」化とでもいえるべき局面である（「旅行」と「旅」の使い分けについては、白幡洋三郎著『旅行ノススメ』（中公新書、一九九六）を参照）。もちろん、我々の旅行の実態が、移動の困難と危険の排された安

全で楽しい「旅行」であることに違いはない。しかし、その一定の安全と安心に包まれた旅行の中で、「旅」的なものへの憧憬、特に、「ういものつらいもの」であり「楽しい」ものでもあるという、「旅」の両義性を求める傾向が、近頃とみに感じられるのである。

例えば検索エンジン最大手のグーグルを用いて「旅に出ます」というフレーズで検索してみると、ブログ等の個人サイトを中心に四十五万二千件の検索結果が出てくる（二〇〇八年八月現在、同じく「旅行に行ってきます」では六万九千件、「旅行に行きます」では二万五千件）。しかし「旅に出ます」というフレーズを用いた人のうち、真に「旅」らしい、つまり、苦行のような「旅」に出た人は、ほとんどいないに違いない。そのように考えると、この結果からは、非常に多くの人が自身の「旅行」をあえて「旅」と表現している、ということが言える。もともと、この調査は非常に大雑把なものであり、数字そのものはほとんど意味をなさないが、「旅行」を「旅」と呼びたがる傾向の強さがうかがえる、というくらいのこととは言っても過言ではないだろう。

旅行をあえて「旅」と呼ぶのは、多くの場合、「旅」という言葉の持つイメージによって旅行報告に詩情を添えるためであろう。実際、前述の検索で出てきた旅行記などを読んでみても、次のような二つの書き方が多くみられる。一つは、旅行先での小さな事件や予期せぬ出来事を大きく（場合によっては大袈裟に）取り上

げ、ストーリー全体に起伏をつける書き方。もう一つは、どこで何を見たかということよりも、自分は何をどう見たかということに力点を置き、他人の旅行記と差別化する書き方である。どちらも旅行の物語性を強調しようとする工夫であろう。もともと、これらのことは、古今の文筆家によってしたためられた膨大な数の旅行記においては、表現手法として少しも目新しいことではない。しかし、こういった作業が、ほとんど旅行文化の一部分として一般大衆に浸透してきたのは、比較的最近のことではないだろうか。そういう意味で、これまで筆者の述べてきた「旅」というのは、「物語」に置き換えても差し支えない。すなわち、昨今の旅行のあり方に筆者が感じている旅行の「旅」化とは、単なるノスタルジーではなく、「旅行」の物語化なのであり、「旅行」の歴史の新たな局面である、と考える。

## 二、「見ること」偏重の旅行から「歩く」旅へ

ここで、この旅行の「旅」化（＝物語化）の意味と可能性について、もう少し考察を進めてみたい。先にも述べたように、現代に生きる我々の旅行というのは、多くの場合、ある一定以上の安全と安心の中で行われる。それは、言うまでもなく、交通インフラやサービスの充実といった環境の整備があつて初めて可能にな

ることである。しかしその一方で、近代以降の旅行環境整備のプロセスは、少し違った角度から見ると、旅行という文化が「見ること」を偏重していくプロセスでもあった。移動の困難と危険が軽減され（もしくは取り除かれ）、旅行が広く一般に浸透するにつれて、旅行を決行することは、「数ある見どころのうち何を見るかを選択し、それを見ること」とほとんど同義になっていったのである。

ところが、人々は「見ること」偏重の旅行に飽き足らなさを感じはじめている。そのことを筆者は、前述のインターネット検索で出てきた多数の個人旅行記や自身の旅行体験など、さまざまな場面で実感している。また旅行案内書等にも、そのような現象の反映ともいうべきものが散見する。例えば「五感」の時代と言われるはじめた一九九〇年代半ば以降（参考：『五感』の時代——視・聴・嗅・味・触の消費社会学、博報堂生活総合研究所編、プレジデント社、一九九四年）、『五感で味わう中国大陸』（奈良行博著、遊学叢書、二〇〇二年）、『五感に刻む旅の思い出整理術』（下川裕治著、PHP、エル新書、二〇〇三年）、『五感で楽しむ東京散歩』（山下柚実著、岩波アクティブ新書、二〇〇三年）など、「見る」だけの旅行からの脱却を促すような著作が数多く出ている。視覚の偏重がもたらす社会や文化の前途を憂慮し、五感のバランスを取り戻すことの重要性を訴えるのは、もちろん旅行のあり

方というテーマに限った話ではない。例えば『足が未来をつくる——〈視覚の帝国〉から〈足の文化〉へ』（海野弘著、洋泉社新書、二〇〇四年）はそのような主旨の近著の一つであるが、その中で著者の海野は、視覚以外の感覚はすべて対象に近寄らなければ感じられないことを指摘し、視覚偏重文化の対抗文化として広い意味で「歩くこと」の大切さを説いている。

### 三、「空間の移動」から「移動という空間」へ

——空間社会学的な視点から

「見ること」偏重の旅行から「歩く」旅へ。この変化をより分析的な視点から理解するために、旅行する人（旅行者）と旅行される場所（旅行地）の関係に着目し、空間社会的に捉えなおしてみると、次のような見方ができる。すなわち、旅行という行為の中で、旅行者と旅行地は、見るもの—見られるものという固定的で静的な関係から、歩くという行為を媒介とした生成的で動的な関係に変化する、という見方である。

主に都市を扱う社会学分野においては、ここ数十年の間に「空間」の概念が大きく変化している。一九七〇年代以降の都市社会学の隆盛を支えたのは、記号論やテキスト論のような分析枠組であり、その中で、都市を生きる人々と都市とは「読むもの—読ま

れるもの」という関係の中に位置づけられた。しかし一九八〇年代後半以降、空間とはもっと相互媒介的なものであり同時生成的なものであるという主張が現れ、従来の都市論の流れを踏まえながらも、我々の実感により近い空間像をあぶりだすための分析手法が模索されるようになる。例えば、社会学者の吉見俊哉は、その著書『都市のドラマトウルギー』（弘文堂、一九八七年）において、都市空間を「出来事」としてみる視座を提案している。吉見は、自身が「上演論的パースペクティヴ」と名づけたその視座により、盛り場を「上演」に見立て、盛り場と盛り場を生きる人々を上演と演者の関係に位置づけた。また、ドイツの社会学者マルティナ・レーヴ (Martina Löw) はその著書『空間社会学』（原題 *Raumsoziologie*, Suhrkamp, 2001）において、社会学における空間概念の系譜をまとめた上で、現代の空間現象の実態を具体的に記述し、それらを視野に入れた新しい分析枠組の構築に向けて「空間とは、生きものと社会資産との相互媒介的な機制である」というテーゼを提案している。

記号論やテクスト論に見られた、「読むもの―読まれるもの」という人々と都市の関係は、まさに従来の旅行における旅行者と旅行地の「見るもの―見られるもの」という関係に対応しているといつてよい。一方で、吉見やレーヴに見られる相互媒介的な空間概念は、とりもなおさず「歩く」旅によって我々が目指している

（しかし今のところまだ姿のはつきりしない）新しい旅行像に重ねることができであろう。また、こういった視点を導入することによって、前者において空間の移動はあくまで「見る」ための手段であつたのに対し、後者においては、移動それ自体が空間を生成する機制の一部になっている、という違いも浮き彫りになってくる。

#### 四、「壁なき家での暮らし方」と「旅の思想」

最後に、ある日本人歴史学者の「旅」に関する考察を紹介し、筆者がこれまでに述べてきた仮説的見解のまとめに代えたい。

イギリスの旅行記作家ブルース・チャトウイン (Bruce Charles Chatwin) は、その生涯を通して「人はなぜ旅に惹かれるのか」という問いの答えを求め続けた。晩年には、人を旅に駆り立てるものの、その動機のルーツを遊牧民の移動生活の中に見ることができないのではないかと考え、オーストラリアに渡り、アボリジニの世界に入り込んで彼らと共に暮らしたりもしている。アボリジニの生活実態とチャトウイン自身の思考の記録は『ソングライン』（芹沢真理子訳、めるくまーる、一九九四）という著作にまとめられた。

このチャトウインに共鳴し、オーストラリアの地を第二の故郷

として研究生生活を営んでいた保莉実という日本人の歴史学者がいる（残念なことに彼は『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』という書物を一冊だけ遺し、二〇〇四年に三二歳の若さで亡くなった）。彼は、ホームページに掲載した「アボリジニは旅人か？」という文章の中で、チャトウインの「ソングライン」に言及している。そこには、彼がチャトウインから受けた影響の大きさを認めながらも、チャトウインとは違った彼独自の見解が述べられており、非常に興味深い。以下、少し長くなるが、その文章を一部紹介したい。

……この本のなかで、チャトウインは、アフリカにおける人間の起源にたちもどり、もともと定住型ではなく、移動生活を前提にした進化を遂げた動物である人間（ホモ・サピエンス）には、根源的に旅（放浪生活）への希求があるのではないかと考えたようなのです。（中略）ところが、その後多くの文献を読み、そしてグリーンジの人々と約一年にわたって共に生活し、たくさんのかことを学び経験した今、僕はチャトウインと全く正反対の結論に達しました。それは、「アボリジニは旅人なんかじゃない！」というものです。（中略）アボリジニは放浪しません。移動生活民は絶対に放浪しないのです。彼らにとって、好き勝手に放浪することは、共有の精神に反し

た自分勝手な行為です。だから日本人を含めて、世界の定住型民族の「旅好き・放浪癖」は、聖霊や隣人と共有する広大な大地としての「家」をもたず、壁に囲まれた小さな箱、「建物としての家」に我が家を限定された人々に特有の（つまり人間の起源とは無関係な）比較的新しい欲求であるように僕には思えます。僕らがアボリジニから学ぶべきことは、「旅の思想」や「放浪生活」ではなく、「壁なき家での暮らし方」なのです。そして、「壁なき家」を獲得するために必要なのは、おそらくは「共有の思想」なのだと思います。

(<http://www.dinkun-j.com/STORY/hokari/hokari4.html> より引用)

「旅好き・放浪癖」が人間の起源と無関係であると言い切ってしまういいものかどうか、これは筆者には分からない。しかし、移動民族から学ぶべきは「壁なき家での暮らし方」である、という保莉の指摘は示唆に富んでいる。保莉の言うように、これはたしかに「旅の思想」とは相容れないものかもしれない。けれども今、我々の旅行文化が、上で述べてきたような意味で新しい局面を迎えようとしているならば、この「壁なき家での暮らし方」こそ「旅の思想」を刷新する大きな手がかりになるのではないだろうか。そしてこのような考え方は「共有の思想」を学ぼうという保莉の主張の根幹に対しても、決して相反するものではないだ

ろう。

## 五、国際研究集会「旅と日本『発見』」を振り返って

本研究集会では、そのタイトルに「旅」という言葉が含まれているが、その「旅」の意味を事前にかつちりと定義することなく、「旅と呼べそうなもの」が様々な時代と地域から持ち寄られ、それぞれに異なる方法や切り口で論じられた。こうして議論された事柄は、筆者にとって、恥ずかしながら初めて耳にすることばかりであった。しかしそれにも関わらず、いずれの研究報告も講演も非常に興味深く拝聴することができたのは、多岐にわたる議論の背景に、旅の物語性、移動の空間性というテーマがつねに見え隠れしていたからであり、そのことによって、それらすべての議論が、旅行文化の新しい局面という一つの明るいテーマに収束していく可能性を感じたからである。このような研究の蓄積とともに、日本の旅行文化がより豊かなものになっていくとすれば、それは非常に意義深いことであると思う。